

# 戦後文学試論（一）

—— 椎名麟三『美しい女』論 ——

尾 西 康 充

## 要旨

椎名麟三は野間宏・梅崎春生・大岡昇平・埴谷雄高らとともに、戦後派作家として文学史上に位置づけられている。かつて吉本隆明は椎名を評価して「戦後作家のなかでは、日本の下層社会を内部的にえがきうる唯一の作家」であったと論じた（「戦後文学は何処へ行ったか」、昭和三二年八月）。椎名の家族関係や獄中転向などの複雑な経歴を振り返れば、それは正鵠を射た評価であったと考えられる。

しかし、吉本はそのような肯定的な評価と同時に、椎名の文学がやがて「下層社会のあいだを悶えあるいた体験を内奥からえぐり出すかわりに、その間に身につけた処世術を観念化」する方向へ逸れてしまったと手厳しく批判している。そして、それが典型的にあらわれているのが『美しい女』（昭和三十年）という作品であったとするのである。

本論文では、吉本の批判を十分に承けつつも、実は椎名が『美しい女』のなかで、実存的な人間関係の架橋を試みていたことを明らかにする。

## 序

「三度目の正直」。この言葉は、どのような事柄でも三回目にはきつとうまく行くであろうことを意味する常套の言い回しである。椎名麟三の自伝体小説『美しい女』（「中央公論」、昭和三十年五～九月）で

は、それが二度、物語のクライマックスにさしかかる大切な場面で使われている。

この『美しい女』という小説は、作家椎名の六十二年の生涯のなかで最も円熟した時期に書かれた作品とされ、福田恆存や吉田精一らとともに昭和三十年の芸術選奨文部大臣賞を受けている。青野季吉・臼井吉見・河盛好蔵・中島健蔵・中村光夫・山本健吉・吉田健一ら七人の選考委員は、その選評として、「椎名麟三氏は、『美しい女』において、社会の変動の中に誠実に生きようとする平凡人の原型を平易な文体で見事に描出、戦後文学に新しい人間像をもたらした」と述べ、それにきわめて高い評価を与えている。昭和初年代の左翼運動から昭和十年代の大戦にいたる暗鬱な時代のもので、人間を威圧するような一切の「異常なもの」に違和感を唱える、交通労働者木村末男が三人の女性と取り結んだ関係を自叙伝風にナラティヴするのが、この小説の基本構造である。

「平凡人の原型」を描出するという小説のモチーフは、「三度目の正直」というような、ささやかな祈念の託されるありふれた言葉のなかにも巧みに表現されている。それが作品中で最初に登場するのは、元バスガールでA市のカフェーに勤めているひろ子が、S電鉄の運転

手武藤の下宿で六十錠ものカルモチンをのみ自殺をはかったときである。小説の語り手「私」は、同僚の身にふりかかった不幸にさしたる関心も示さず、いつものように決められた電車に乗務する。「私」は彼らの「デガダンス」を悲しむどころか、むしろ表現しようのない「おかしさ」すら感じてしまうのである。海ぎわの線路を電車が走りすぎるとき、「私」はつぎのような言葉をふっともらす。

「三度目の正直というけど、あれ、嘘やな」

この場合の三度目とは、ひろ子の自殺未遂のことを意味している。彼女のそれまでの人生をふり返ると、すでにもう二度も自殺が図られていた。バスガール時代、組合活動のストライキがもとで警察に連行されたこと。そしてさきの武藤とおなじ電鉄の運転手船越とともに、海のみえる宿の二階でカルモチンを服したときのこと。そして、これがついに三度目の未遂事件となったのである。

ひろ子は初々しい女学生のように髪をおかっぱに切っている。彼女の豊かにもりあがった胸、肉付きがよく弾力のある肢体からは意外にも「生命力の過剰」が感じとられ、みずから命を絶とうとする破滅的な衝動とは矛盾するかのような印象を受ける。たえず死への衝動と隣りあわせに在る精神状態におかれながらも、その豊満な肉体には生命力を充溢させている——そのような彼女の存在は、エロスとタナトスをめぐる人間の「へ生」の不安定さを象徴的にあらわしているといえるであろう。

小説ではその後、助役という職務にあくまでこたわりつづけた武藤が心労のために心臓マヒで急死する。それを機縁にひろ子と急接近した語り手の「私」は、彼女からいきなり「死んで。一緒に死んで」と

告げられる。そのとき思わず「もしおれが死んだら、船越と武藤とで三人目やな」と応えた「私」は、さらにつぎのようにつぶやくのである。

「三度目の正直というさかいな」

この場合の三度目という言葉には、ひろ子とそれ以前に関係のあった二人の男の悲劇的な死をまえにして、それでも本気で彼女を愛せるかという、「私」にとって切実な問いかけがこめられている。ひとり女性の性について、おのれの生命の危険を冒してまで愛し通せることができるのか。だが、それまでの「私」がほかの何よりも強く嫌悪してきたのは、死をたやすく口走ることの軽率さやそれを大仰に語ることのくだらなさであった。彼には、この世には生命を捨ててまでもり抜かねばならないことなどないのだという強い信条がある。そのため結局、自分に救いを求めてきたひろ子を突き放すことになるのだが、彼の場合、他者によって自分の信条が究極的に試されようとする時には、いつもその孤独な心裏にふっと「美しい女」の幻像があらわれるのである。へあれか／これか」の判断をせまられて「私」が逡巡するのを、まるで憐れむかのように微笑む「美しい女」は、たとえいかなる場合でも、「私」に赦しを与えつつけるのである。

人間は「神と虚無との中間者」であるというパスカルの有名な言葉がある。この小説の「私」もまた「美しい女」の幻像による赦しと、胸奥にひそむ虚無とのあいだを、独りさまよう人間である。小説に描かれているのは、「死ぬほどに懸命に生きる」ことが求められる「へ生」の逆説的な隘路のまえで茫然とする「私」の姿である。これまで賛否両論、さまざまな評価が作品に下されてきたが、椎名の「故郷なる日

常性への回帰<sup>1)</sup>(高橋和己)が小説の重要なモチーフであることは、ほぼ一致した見解となっている。それは椎名が「かつて嫌悪し脱出した庶民の日常性へと微笑しながら回帰してゆく」精神遍歴の帰着点であったともいえる。そこで以下、この「故郷なる日常性への回帰」というモチーフについて論究する。

## —

『美しい女』の作品世界には、語り手「私」の観念のレヴェルであられる「美しい女」を別にすれば、生活現実のレヴェルで三人の女性が登場している。齊藤末弘氏によれば、売春婦の倉林きみは「反社会的自由」、出札係の木村克枝は「社会的自由」、同僚の妻ひろ子は「反社会的・社会的自由から切り離された非現実的自由」の観点から描き出されている。また三人の女性に共通する特徴として、第一に「しすぎる」という過度性、第二に自己絶対化の傾向性、第三に彼女たちは決して「美しい女」にはなり得ない、つまりつねに観念のレヴェルの幻像に對置されることで、三者三様の「へ生」の諸実相が浮き彫りにされていることが挙げられるという。彼女たちはそれぞれ売春や労働運動、そして現実逃避という別の方法で自由を求めつつも、それをついに手に入れることのできない人間の限界というものを、椎名はいわば全体小説的な筆致で描写しているのである。

それら三人の女性のなかでもとくに、ひろ子の屈折した存在が異常にみえるのであるが、それを理解するためには「私」による、つぎのような述懐が一つの手がかりとなる。

たしかにひろ子の危険は、きみのそれとも、また克枝のそれとも性質のちがったものであった。とにかくきみや克枝の危険に對

しては、私もたとえ情ない恰好であったにしろたたかうことが出来た。だがこのひろ子の危険に對しては、私は、どうしていいかわからなかったのだ。

どう向きあえばよいのかおよそ見当のつかない、ひろ子の「危険」は何によるものであろうか。彼女とそれ以前に關係のあった「水兵隊あがり」の船越や「いかめしそうに張った肩」の武藤にしても、きわめて強健な肉体を持っている。にもかかわらず、彼らの精神には暗い虚無が巢喰っているのである。彼らもまた、彼女のものと通底するかのような「へ生」の不安定な状態におかれていることが暗示されている。彼女をおびやかす死への衝動の根源には一体、何があるのか、ひろ子はその原因を「私」に告げる。

「うち、裏切もんやし。うち、バスにつとめてるとき、ストライキで警察につれて行かれたやろ。竹刀をうちのあそこへつつ込みはったんや。そいで……」

彼女が繰り返し自殺を試みる本当の原因は、それまでの男性關係にあるのではなく、実はバスガール時代に受けた屈辱的な拷問による同志への裏切りにあったという。性的な拷問の残酷さはもとより、彼女の心理には、この「裏切り」という行為が精神的外傷(トラウマ)となつていつまでも遺り、それがたえず死への衝動を引き起こしていたのである。

だが、これは単に作品世界のなかだけの問題ではなかったであろう。なぜなら、これも齊藤氏がすでに明らかにしているように、椎名麟三<sup>3)</sup>こと大坪昇が実際に勤務していた宇治川電鉄の社内では、彼が警察に

投書・密告したため三人の同志が特高に逮捕されたと、長いあいだ信じられていたという事実があったからである。そのことは椎名が語り手の「私」のモデルとされた原末治と二四年ぶりに書簡を交わしたことがきっかけで、思いがけず知らされたのである。この真偽についてはすでに調査がなされているが、元電鉄運輸部長の正木細氏の証言によれば、一斉検挙で無実の電鉄社員をも勾引した刑事が、そのような暴挙の「言い逃れ」として、大坪による密告通報の風説を撒いたのだという。追いつめられたひろ子の姿には、椎名自身も実際そのようになるはずであったところの可想的な存在として、作家みずからの姿が仮託されているといえるであろう。

大阪刑務所の未決監独房での〈転向〉体験が椎名の文学において決定的なモチーフとなっているのはいうまでもない。そのようなモチーフは、個人の人格を無視して服従を強いる一切の権威やイズムに対して「私」が不信感を抱き、ただ平凡な一人の市民としての生活感覚を回復させようとする態度の描写のなかに具象されている。その場合、生活感覚のそなわった日常性を「私」に取り戻させるための啓示となるのが、あの「美しい女」の幻像である。ふつう啓示といえは、日常生活に埋没しかかった人間の自己意識を覚醒させる、いわば非日常への「脱自的」な効果があるのだが、ここではまったく逆に日常へと立ち戻らせることによって、それを実現しようとしているのである。そこで、このようにきわめて逆説的ではあるが重要な働きをする「美しい女」の幻像について、小説におけるその啓示の意味を考えてみたい。

## 二

おそらく人間は、自分の過ごしている日々の生活が生き生きとした

ものと実感できないようなとき、なぜこのような状態に陥らなければならないのか、いつまでそうしていなければならないのか、そこから抜け出すにはどうすればよいのかなど、さまざまな問いを発するであろう。おのれの無力さと存在の有限性とに絶望すればするほど、それらの問いに対する究極的な答えをより一層切実に求めるにちがいない。ドイツの神学者パウ・ティリッヒ (Paul Tillich. 1886-1965年) は、このような「実存的疎外」の状況におかれた人間に対して、それを超越するための「答え」をあたえることが神学の本務、彼のいうところの弁証神学 (apologetic theology) の方法であるとする (『組織神学』、一九五一年)。彼にしたがえば、人間が究極的なこだわりをもって関心を寄せるものはみな神と呼ぶべきものであり、さきに神が存在して人間がそれに関心を寄せることを要求すべきものではない。やや長くなるが彼の主張を引用してみよう。

「神」は人間の有限性に含まれている問題に対する答えである。神は人間が究極的に関心するものを表わす名称である。このことは、先ず神と呼ばれる存在があり、次に人間がこの神に対して究極的に関心すべきであるとの要求を意味しない。それは、何ごとでも人がそれに究極的に関心するならば、それがその人にとって神となることを意味し、また逆に、人間は彼にとって神であるものについてのみ、究極的に関心しうることを意味する。<sup>(5)</sup>

ティリッヒによれば、神とは人間が究極的に関わるものの名称であり、どのようなものであれ究極性を帯びているものはみな神と呼ぶべきものである。もしかりに人間の心がそれに透徹することができれば、おのれの生死をはるかに超越した「永遠の今」の境地がもたら

されるという。

ティリッヒの所説は、はじめから神の實在を絶対的に自明のものとする（カール・バルトのごとき）超越主義神学ではなく、まず人間における「実存的疎外」の現実に着目することからはじめられる。労働運動の教条的なイズムのもとで、あるいは戦時統制をすすめる「非常時」という号令のもとで、実存的な危機に晒されていた「私」にとつて、「美しい女」の幻像による啓示は、ただ平凡な一人の市民としての生活感覚を回復させてくれただけではなく、つかの間ではあるものの、自己の不安定な「へ生」に救いをもたらしてくれた。ある意味でそれはティリッヒが人間の「究極的関心」として「神」を位置づけた事態に相通するものがあるともいえる。ただ「私」にとつて、それがわずかに一瞬であり永遠のものでは決まらなかったことから推察されるように、椎名は「私」の生活現実のレヴェルから少しも離れず、絶対的なものへと安易に超越することの困難な、人間における実存の問題を終始描き出しているのである。観念のレヴェルに逃避してしまい、そこからリアルな認識を欠いたまま宗教的救済が導かれていたわけでは決していない。

「無自覚な労働者」・「卑怯者」・「非国民」など、語り手の「私」は自分を取りまく人々からさまざまなレッテルを貼られて罵倒されつづける。それでも、いつものように決められた電車に乗務することを通じて、現実社会との接点をわずかに保ちえているのだが、絶対的な決断を迫られないかぎりでの人間関係は、ほんの表面的な点的形態で終わるしかない。他方、椎名における「故郷なる日常性への回帰」は、絶対性を付託して語られる一切の権威やイズムの狂気に抵抗するため、作家特有の方法であった。「死ぬほどに愛する」ことや「死ぬほどに生きる」ことを求められる、「へ生」の逆説的な隘路のままで茫然

と立ちつくす「私」の姿が点景されているのである。それはこの小説が人間の点的関係をただ肯定するだけの境域に収まらず、あらゆる「人間における絶対性」にたたかいを挑む作家が、アイロニーを踏まえた新しい表現の可能性へ飛躍しようとしていたことを意味する。

### 三

椎名の文学にかぎらず、非日常の世界のなかで人間としてふさわしい生活感覚がうしなわれてしまうシチュエーションを描くのは、戦後文学に共通する重要なモチーフであった。いまではすっかり定着した文学史的な見方のひとつとなっているが、かつて平野謙は戦後文学をひろく見渡して、コミニズム作家に成長した野間宏とコミニズムなど歯牙にもかけぬ三島由紀夫とのあいだに、武田泰淳・大岡昇平・堀田善衛・椎名らの諸作家が位置していると論じたことがある（『戦後文学の七年』、『日本読書新聞』、昭和二十七年八月）。そこでは椎名と同じく、左右両極にはさまれた中間的な存在として色分けされている大岡の小説にも、女の幻像があらわれて重要な働きをする作品がある。それは戦地において人肉を食らうという、人間にとってまさに極限の状況を描いた『野火』（『文体』、昭和二十三年十二月・二十四七月および『展望』、昭和二十六年一・八月）である。

『野火』の語り手「私」は、肺病のため本隊から見捨てられた一兵卒で、何とか活路を見いだすべく独り彷徨するのだが、やがて「熱帯の野の人知れぬ一隅」で死に絶える最後の瞬間まで、「私自身の孤独と絶望」を見極めようという気持ちになる。疲れた身体を休めるために、「比島」のビサヤ内海に面した村の教会堂で眠っていると、そこに塩を秘蔵していた一組の男女がやって来る。そのとき「私」は怒りの衝動にまかせて、無抵抗の「比島の女」を銃殺してしまうのである。

ところが、それ以後「一つの奇妙な感覚」、すなわちいつも誰かに自分の行動が見張られているような感覚に度々見舞われるようになる。

私は自分の動作が、誰かに見られていると思った。私は立ち止った。しかし音もない暗闇の泥濘の中で、私を見ている者がいるはずはなかった。私はすぐ自分の錯覚を嗤ひ、再び前進に戻った。

（二五「光」）

遠くから自分の動作を監視しているのは、自分が殺した「比島の女」の亡霊ではないかと感じる。それは「一人の無辜の人」の尊い生命を奪ったことに対する深い罪意識によって映し出された幻像であった。

そのまま絶望的な彷徨をつづけているうちに、「私」は度々、臀部の肉が切り取られた形跡のある「新しい屍体」を発見することになる。そこで再び「誰かに見られている」感覚に見舞われるのだが、「私」は辛くも殺人を犯しただけで人肉を喰ったわけではなかったのを顧みて、その幻像が必ずしも「比島の女」ではなかったかも知れないと次第に思いはじめる。

その後、飢餓に迫られた「私」はついに、狂気のなかで「俺が死んだら、ここを喰べてもいいよ」と左腕を叩いて死んだ将校の屍体を喰らおうとする。ところがその瞬間、不意に「私」の左手が右の手首を握って、その行動を阻止しようとするのである。

この変な姿勢を、私はまた誰かに見られていると思った。その眼が去るまで、この姿勢をこわしてはならないと思った。

「汝の右手のなすことを、左手をして知らしむる勿れ」

声が聞こえたのに、私は別に驚かなかった。見ている者がある

以上、声ぐらい聞こえても、不思議はない。

声は私が殺した女の、獣の声ではなかった。村の会堂で私を呼んだ、あの上ずった巨大な声であった。

「起てよ、いざ起て……」と声は歌った。

私は起ち上がった。これが私が他者により、動かされ出した初めである。

（二九「手」）

突如、「汝の右手のなすことを、左手をして知らしむる勿れ」と聞こえてきた声は、さきの教会堂で「私」に「デ・プロフンデイス」呼びかけた「あの上ずった巨大な声」と同じものであったことに気づく。「デ・プロフンデイス」、すなわち「われ深き淵より汝を呼べり（“De profundis clamavit”）」という旧約聖書『詩篇』（第百三十三章第一節）に典拠のある言葉は、神から棄てられた場所にながら、なおも赦しを希って神を呼びつづける祈りの言葉である。罪を犯した人間にとって「希望とは、新たな創造をもたらす赦しの言葉が発せられる夜明けを、全存在をかけて待ちわびること」（B. W. アンダーソン）である。

「神に栄えあれ」という言葉で最後が結ばれる『野火』では、「私」を取りまく状況の極限化にもなつて、その啓示のあらわれる本源が「比島の女」の幻像から「巨大な声」の幻聴へと変わる。その変容はまだ〈個〉の罪意識で受けとめ得た殺人の問題から、〈人類〉の共同倫理の根底を揺るがす食人の問題へと、「私」の省察が深化されて行ったことを象徴的にあらわしている。そのなかで、ややもすれば人肉を喰うという非人道的な行為に及びかねない「私」の心をきびしく戒めつつも、赦しの可能性を同時に告げるのが『野火』における啓示の働

きであった。『詩篇』において「デ・プロフンデイス」の後につづく、「されど汝に赦しあれば、人に恐れ畏まれ給ふべし」（第四節）という言葉に込められた、畏怖すべき神によってこそ罪深き人間には救済がもたらされるのだという祈りが託されていたといえよう。

同じように非日常の世界が点景されながらも、『美しい女』の啓示はいつも寛容の態度を、『野火』のものは赦しが示唆されると同時に戒めの態度を強く表明していた。各々ベクトルの向きは異なるものの、どちらの作品にも共通していたのは、自分が投げ出された非日常の世界に対して、どのように抵抗を試みるかという根本的モチーフであり、そこで発現された啓示は、ただ平凡な人間としてふさわしい生活感覚を回復・維持させようとするものであった。

## 結

そもそも椎名はなぜ「現代のあらゆる絶対性」に対して執拗にたたかい、「芸術の表現の問題」にまでそれを浸透させようとしたのかという理由について、そこに「時代の死と狂気」を見たからだとする。しかし、いざ実際その現場に立てば「一つの絶対性とたたかうためには、それと対立する他の絶対性に身をおくよりほかに場所がない」という「人間の限界」に直面することになるのも承知していた。

あらゆる「人間における絶対性」にたたかいて挑んだ椎名は、そのような「人間の限界」も十分に視野に入れながら、あえて「両面作戦」を用いることを通して、アイロニーを踏まえた新しい表現の可能性を追求しようとしていたのである。価値判断のすべての基準を相対化するための表現の試みは、「美しい女」の幻像による啓示がリゴリズムを排除するような寛容の態度を見せていたことに、何より象徴されている。それを作家自身の言葉になおせば「キリスト者のユーモア」と

なるのだが、さきにも引いた斉藤氏によれば、「椎名の昭和二十六年以降における創造の営為が、すべてユーモアに尽きる」ものとして肯定的に評価されるのである。

ところが、他方でその「キリスト者のユーモア」を懐疑的にとらえる解釈も存在する。そもそも戦後文学は「転向者または戦争傍観者」たちの手になるものであったと断じる吉本隆明によれば、「美しい女」の幻像とは、たかだか椎名の意識の「はぐらかし、とぼけによってつくりあげた虚体のようなもの」でしかなく、所詮は作家自身の「処世術の理窟づけ」の意味しか持たないという。吉本は基本的に「人間の場合を決定するのは関係の絶対性だけである」(『マチウ書試論』、昭和二十九年十二月)という立場に拠っている。彼が「人間と人間との関係が強い絶対性」、さらには「現実における関係の絶対性」という視点を自己の批評活動に固有なトポスとしていたことから判断して、椎名のユーモアが持つ表現の射程を、まったく否定的にとらえたのだと考えられるのである。

『美しい女』の冒頭近くには、全篇を通してあまりめだたない表現なのだが、つぎのような言葉がある。

いまの私の希望は、情ないことながら、この会社を停年になってやめさせられると同時に死ぬことだ。勿論、会社が停年まで、私をおいてくれるならばだが。

会社が「停年」まで自分を雇用してくれるかどうか分からないのに、停年と同時に死ぬことを望むのは、多少ユーモラスである。そして何よりも、自分の死を覚悟してその半生を語りはじめるといふナラティヴのあり方は、たやすく「死」を口にすることの異常性を唱えた

小説のモチーフに矛盾するであろう。だがテキスト内部にある「私」の語り全体を入れ込む形でつくられた、この逆説的な構造こそ、「関西の私鉄に働いている名もない労働者」である木村末男が人間の点的関係の境域を突破して、読者とのあいだに実存的関係を架橋しようとする試みの本質となっているのである。アイロニーを踏まえた新しい表現、すなわち（イエスの語ったとされるが如き）《アイロニカルなユーモア》の狙いは、「頑なな自己へのとられから解放すること、救い出すこと」<sup>13)</sup>（宮田光雄氏）にあり、そこにこそ椎名の目指した〈自由〉の領野が真に拓かれていたのであった。

## 注

本文の引用は『椎名麟三全集』（冬樹社）、『大岡昇平全集』（中央公論社）から行った。

- (1) 「日常への回帰—椎名麟三論—」（『文学』、一九六三年十一月、岩波書店、十九頁）
- (2) 「『美しい女』論（一）—成立事情・モチーフ・テーマをめぐって—」（一九八九年三月、桜楓社、一九六～二〇四頁）
- (3) 同右
- (4) 『椎名麟三—自由の彼方で』第二号（椎名麟三を語る会、一九九七年十月、五五頁）
- (5) 『組織神学』第一卷（Systematic Theology Volume One. The University of Chicago Press Chicago. 1951）（谷口美智雄訳、一九九〇年一月、新教出版社、二六八頁）
- (6) 「ユーモアについて」（『椎名麟三信仰著作集』第六卷、一九七七年九月、教文館）参照。
- (7) 『深き淵より 現代に語りかける詩篇』（Out Of The Depths The Psalms Speak for us Today. The Westminster Press.

Philadelphia. 1983）（一九八九年二月、新教出版社、一二〇頁）

(8) (6)と同書、一三二頁

(9) 同右書、一三六頁

(10) 「ユーモアについて」（『椎名麟三の文学』、一九八〇年二月、桜楓社、一三〇～一四二頁）

(11) 「戦後文学は何処へ行ったか」（『群像』、一九五七年八月）（引用は『吉本隆明全著作集』第四卷（一九六九年四月、勁草書房、一三四頁）から行った）。さらにつけて吉本はつぎのように論じている。

椎名は、下層社会のあいだを悶えあるいた体験を内奥からえぐり出すかわりに、その間に身につけた処世術を観念化する方向へそれゆき、コミュニケーションのかわりにキリスト教的な観念へと昇華していったのである。

（同右）

(12) 『マチウ書試論』（『現代評論』、一九五四年十二月）（引用は前掲書、一〇六頁から行った）。

(13) 『キリスト教と笑い』（一九九二年三月、岩波新書、一〇七頁）